

令和2年度北海道教育大学旭川校教員養成課程
生活・技術教育専攻

社会人入試小論文問題

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題紙を開かないこと。
- 2 この問題紙は、1から2の2ページである。
試験中に問題紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、静かに手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 解答用紙は1枚である。
解答は解答用紙に横書きとし、句読点等も1文字分として、課題に指定された字数以内にまとめること。
- 4 受験番号は解答用紙の指定欄に記入すること。
- 5 下書き用紙は1枚であり、裏表とも使用は自由である。
- 6 解答用紙のみを提出し、問題紙・下書き用紙は、試験終了後持ち帰ること。

問題

問題文は携帯電話の小型化に貢献したりチウムイオン電池のケースを作ったことで有名となった人の著書の一節です。問題文を読んで著者の主張をまとめた上で、それに対するあなたの考えを810字以上900字以内で論じなさい。(配点50点)

[問題文]

プレス加工をはじめようと思ったとき、ドイツ書を片手に独学で勉強した。英語もドイツ語も読めないけれど、写真や図面を見ればだいたいわかった。なるほど、こういうふうやってるんだなど。だから俺のあだ名は「コピー」という(笑)。

どんなに才能豊かな人でも、まったく何もないところからポツと湧き出て発明するなんてことはありえなくて、最初はみんなコピーからはじまる。

ドイツ書との出会いは、俺の恩師である人から教えてもらったことによる。そんな本がどこに売っているかさえ知らなかった。

今の若い人もそうだと思うが、自分の親はそんなに尊敬しないものだ。俺も、うちの親父は頭いいのかな、そんなにうちの親父は腕がいいのかなと疑問に思っていた。金型屋のうちのオヤジに習ったって限界があるからプレスもやろうと思ったとき、世の中に出て知らない会社に入って修行しなければならぬと思ったんだ。

そこである人生の先輩に相談しに行った。当時、俺が三〇代半ば、その人は慶大卒のある大会社の社長だった人で、当時はもうおじいさんというぐらいの年齢だった。

「どうも、うちの親父じゃあ頼りないから、外へ出て苦労したいんです。そこでプレスの技術を学びたい」

「あのね、苦労というのはね、おまえのほうから行くもんじゃないんだ。苦労は、黙ってたって向こうから来るものなんだ。だから、おまえのほうから行くことはないんだ」

「でもうちの親父の技術を盗んだって限界があるし……」

「なんのために本があるんだい。本を買って勉強すればいいじゃないか」

「そんな本、どこに売ってるんですか」

「日本橋の丸善ってところに行けば、洋書の専門書がある。そこにプレスの本があるから、それを買って勉強しなさい」

「でも洋書なんて。俺は英語も何も読めないんです」

「絵と図面を見ていればなんとなくわかるもんなんだ。おまえも職人だろう。それを見ればいいんだから、とにかく見て覚えなさい」

そう言われて次の日にすかさずその本屋に行って、一番よさそうなものを買ってきた。ドイツの『プレス便覧』という本だった。今から四〇年近く前の話だが、値段は忘れもしない、一万二五〇〇円の本だった。

当時、プレス技術はドイツが先進国で、基本的なことがしっかり書かれてあった。なにしろその本がおもしろくて、いつも眺めていた。読むのではなく、図とか写真を眺めるんだ。

このドイツ書を二〇年間ぐらいは毎日、眺めていた。今でもたまに開くときがある。わからないときにずっと開くと、ヒントを得ることがよくある。プレスの技術の、本当に基本のところが書かれているんだ。

本を眺めていると、プレスは本当におもしろい技術だと思った。やってみると、そのとおりできた。硬い金属が思いどおりの形に変わるのがおもしろくてしかたなかったなあ。

(出典：岡野雅行『俺が、つくる！』中経出版、2003年、164-166頁)